【造本美と嵯峨本の世界】

館蔵〈光悦謡本〉『矢卓鴨』のことども

（料紙・雲母模様・活字書体・版組・印刷・装訂など）

中央図書館　森上　修

江戸時代のはじめ、慶長年間の中ごろ（1605年）すぎに、本阿弥光悦（寛永三筆の一人）風の字様で印刷された行草体仮名交りの観世流謡本の木活字版が出現して隆盛をきわめた。

これらの謡本は、そのころ京洛の富豪として知られた角倉家の素庵が嵯峨別邸の印刷工房において製作にかかわったものと考えられ一般には〈光悦謡本〉とも呼ばれている。

表紙と本文用紙に具引きを行い、下地に雲母模様の意匠を施して、用紙の両面に印刷した頗る典雅な中綴じ列帖装仕立ての豪華本があり、その数多くが今に伝わっている。

この装訂方式はわが国古典の書写本のそれを踏襲したものと見倣されるが、当時の和装本にあっては用紙の表側にだけ印刷を行いそれを外折して平綴じにする、中国・明刊本の様式に従う装訂のものがむしろごく一般的であった。

後陽成天皇が開版なされた一連の慶長勅版や徳川家康の伏見版・駿河版などもみな、この袋綴じ方式の装訂になっている。

特に、その慶長勅版の諸本に関しては天理図書館の木村三四吾先生を中心とするメンバーや私大図書館協会阪神地区書誌学研究会の方々の間で諸種の調査が進んでおり、ごく最近では、これら慶長勅版や袋綴じ形式の古活字印本についてはその組版・印刷方式に関する基本的な事柄がかなり詳しくわかってきているのが実情である。

ところが、両面印刷による謡本のような列帖装の古活字本については、そうした調査がこれまで殆ど行われていないようである。

植字盤の使用台数とか、印刷時における版面設定の実態などを具体的に把握するためには、まず一帖分すべての印出字について綿密な調査をしなければならないであろう

かつて、このことにつき阪神地区書誌学研究会で列帖装謡本の総合的な版面精査をしてみてはどうかとの提案があったが遺憾ながら、それは現在のところ実現するまでに至っていない。

雲母模様を表紙および本文に施した列帖装の〈光悦謡本〉は、本館でも数点であるが収蔵する。

昨年の春、所用でその『矢卓鴨』（1帖）について、書誌的事項を再査したが、その際、該書の造本上の事柄に関していささか思いを巡らせるところがあった。

それらのことについて、私見を交えながらここで少し述べてみることにしょう。

列帖装仕立ての嵯峨本古活字版の観世流謡本つまり〈光悦謡本〉は、両面刷りの一番二帖からなっている。

特製本と称される館蔵のこの『矢卓鴨』（大きさ：240粍×181粍）では、具引きして雲母模様を施こしたのち、行草体の文字が組版印刷されていて、その料紙は厚い。

表紙や本文にみられるこうした雲母模様の図柄は、京洛の上層町衆・俵屋宗達の関与する意匠工房の手になるものかと言われているが、定かではない。

第一折り4紙、第二折り3紙を半折して重ね、端を少し折り曲げた前・後表紙をその間に挿み込んで、折目の部分を糸で縫い綴じしている。

袋綴じ本の半丁分に当る一面（頁）は7

行、行13字詰、第３面より本文が始まり、印字面数は第一折り14面（第１・２面、白）、第二折り９面（第10－12面、白）で、行間に節付のゴマ点が排植されている。

このゴマ点は活字駒ではなく、棒状のインテルに彫出したものであろうか。

ところで、これらの料紙については従来、厚様の雁皮紙を貼り合せたものとみなされてきた。しかし該書を詳しく調べてみると、胡粉を塗って雲母模様を施こした下地の薄様雁皮紙の裏面へ更に薄様楮紙が裏貼りされていることが確認できる。

つまり該書は二種類４枚の薄様紙を貼り合せて厚様の料紙に仕立てているというわけである。

なお、参考までに付言すると、雲母押し模様の〈京からかみ〉の唐紙工房・唐長では、現在、料紙として越前や美濃産などの楮紙を湿らせて使用しているとのことである。

当主・千田堅吉氏のご教示によれば、模様は主として朴材の版木に突き彫りと呼ばれる技法で垂直に鋭く深彫りされているという。

雲母、姫糊、布海苔を混和した色材を円輪のフルイという用具に塗り込み、それをこの版木に満遍なく付着させる。

それから、具引き料紙を置いて、その裏面を刷具でなく手の平で軽く撫でさするようにして模様を紙面に転移させるのであるが、これにはかなりの熟練が必要であるとされている。

版木上の雲母模様を最適の状態で具引き料紙へ付着させるためには、下地の雁皮紙は薄様を用いなければならない。

つまり、具引きを行った加工料紙は、版木の彫刻面の微妙な感触が手の平へ充分に伝わってくるほどの薄さのものでないといけないのである。

ところで、光悦と深くかかわり、慶長期の中頃すぎに活躍していた紙師宗二なる人物はおそらくこうした雲母模様などの下絵加工の仕事に従っていた唐紙（からかみ）の専門職人であったと考えられる。

次に、本文の活字印刷の方法に関してであるが、これには、雲母押しの料紙14枚に裏白の表面印刷を行ったのか、それとも裏打ちした２枚分を貼り合せた厚様紙７枚に表裏へ両面印刷したのか、と言う問題が派生する。

しかし、印出された各面の字様についてそ

の全体を詳細に観察すると、各面の字様はかなり強い摺刷力をもって字画に喰い込むように印出されている事例が数多く認められる。

従って、このことから、貼合せによる厚様紙に表裏両面の二度刷りを行ったものとは考えられないのである。

さて、それでは列帖装本ではどのような方法で各版の活字組版が行われたのだろうか。

袋綴じの古活字印本では、本文の記述順序に従い、右・左の２面を連続した１版（１丁）分として植字・組版するが、このような列帖装仕立ての活字印本ではそれができない。

かって、田中敬博士（本学初代図書館長）はこのことにつき、木版の列帖装本と同じ要領で版面構成を行なったものと見做されたことがある。

その場合の各版における版面の対応関係は

［Ｘ：４・ｎ（１折帖の紙数）－Ｘ＋１］

となるであろう

例えば、１帖折が４紙からなる場合、第１面と第16面、第２面と第15面、第７面と第10面（16－７＋１）と言った組合せの原則を守り、それぞれ対応する２面分を順次に植字盤へ排字・組版しながら印刷して行くことになるであろう。

ところで、これまでどなたからもご指摘がないのであるが、これ以外に二台の植字盤を交互に用いて、袋綴じ本の場合と同じく、本文の順序通りに１面（半丁）分単位で組版と印刷を繰り返し、一紙に二度刷りを行って列帖装本に仕立てるというやり方も実は考えられるのである。

この方法だと、列帖装用に一面づつを組版して二台の植字盤でそれぞれ第１面および第２面を片側印刷したあと、なお解版せずに引続きその二面分を一版に組合わせ順次に印刷を行うとすれば、活字の組み替えによる別版を作らずとも、並製の袋綴じ用の活字印本が簡便に、しかもほぼ同時に得られるという理屈になるわけである。

いずれにしても、〈光悦謡本〉のようなこうした列帖装本では、果して如何なる方法によって組版・印刷が行われていたのか、それは残念ながら現在のところ、確かなことは未詳と言わざるを得ない。

そうした意味からも、今後の課題として、〈光悦謡本〉の各版面における印出字の正確な総合調査と活字コマの使用状況の把握が是非とも望まれるところである。

それでは、ここで幾多の諸匠が加わって誕生した〈光悦謡本〉の造本過程を再現しておこう。紗漉きの薄様雁皮紙が紙漉師から具引師の手に渡り、具引きを行って唐紙師へ廻される。そこで下絵版木から雲母模様を具引き紙に転移させ、更に薄美濃を裏貼りしたのちそれらを造本工房へ納入する。その工房では料紙の片面に本文を活版印刷してから刷紙の裏側を貼り合わせて四面分を一枚とし、そのあと表装や列帖の縫い綴じといった装訂作業を経て、１帖分の仕立てが完了するという按配なのである。

それにしても、大変な手間と費用のかかる贅沢な仕立てのこうした〈光悦謡本〉の製作を平然として依頼した主は、いったい誰であったのか。

おそらくは大藩の大名家筋などであったのだろうが、そのあたりが大いに気に掛かるところである。

最後に、この『矢卓鴨』を再調したあと、もう一つ疑問を感じた事柄がある。

それは、［嵯峨本］のうちで最も中枢に位置づけされるべき『伊勢物語』など、正統な仮名古典の古活字印本が、古写本の伝統的な列帖装によってはおらず、その本文用紙は具引きや雲母模様を施こさないごく通常の楮紙であり、それら現存本の殆どがいずれも中国刊本の袋綴じ線装形式の装訂に仕立てられていると言う事実である。

そのうち『徒然草』は袋綴じの楮紙に雲母模様を施こしているものの、〈光悦謡本〉の特製本がすべて列帖装で、具引き雲母模様が

あるのとは対蹠的であって、この点、何とも理解に苦しむところである。

もっとも、わずかに『方丈記』の第1種本だけは〈光悦謡本〉の特製本方式に従ってはいる。

ところが、それは袋綴じ形式の第2種本に比較して誤植や衍字の箇所もあり、杜撰な点が見受けられる。

〈光悦謡本〉を含め、これまであまりにも過大の評価を受けてきた「嵯峨本」のこうした類に属する豪華特製本の存在を改めて今後どのようにとらえ直すべきなのか。再考を要する課題であろうとおもう。

本稿をなすにあたり、古紙鑑定の方法について種々ご示教いただいた成子哲郎氏をはじめ、丹下哲夫・千田堅吉・谷野剛惟氏らに対し厚くお礼を申し述べたい。

（平成7年11月25日記）